

## 現存在の本来性について

松本 佳菜子

### 1. はじめに

『存在と時間』はマルティン・ハイデガーが存在論の書として出版したものである。この書は第1部第1編第2編のみが公刊され、その中でハイデガーは、「われわれ自身が各自それであるような」存在者、現存在（Dasein）について分析している。この『存在と時間』は、未完の書であるにもかかわらず、出版以来多くの人々に読まれ、様々に議論されてきた。その中でも、第1部第2編で展開される現存在の本来性（Eigentlichkeit）すなわち本来的な在り方についての議論は多くの人々の関心を惹いてきた。しかし一方で、現存在の本来性についてのハイデガーの議論は、「決意性（Entschlossenheit）」や「先駆（Vorlaufen）」といった一見不可解な表現から成っていることもあり、その内容について研究者の間で共通の見解があるというには程遠い状況にある。

ハイデガーは本来的な現存在の在り方を先駆的決意性（vorlaufende Entschlossenheit）として特徴づける。「先駆」や「決意性」がいったい何を指しているのかということについては、これまでも無数の議論が行われてきた。その中には後に挙げる W. ブラットナーの研究のように、先駆と決意性のどちらか一方のみを扱うものもあった。しかし、ハイデガーが現存在の本来性を「先駆的決意性」と特徴づけているように、現存在の本来性は、先駆と決意性の一方からでは明らかにできないものである。しかも、先駆と決意性の現象は、ハイデガーが「この二つの現象を外面的に継ぎ合わせることは許されない」（SZ, 302）と述べているように、内容的に密接な連関を持ったものである。先駆と決意の連関は、ハイデガーが臨証（Bezeugung）という言葉で表すように実際のわれわれ現存在の在り方を検討することによって明らかになるものである。そうであるとするならば、先駆的決意性、つまり現存在の本来性を理解するためには先駆と決意の連関を見届けた上で現存在の実際の在り方を考えることが必要になる。本稿は、具体例に則してハイデガーの先駆的決意性に関する議論を解釈し、その中で先駆と決意の連関を見届けることを目標とする。具体例に則して議論を進めることは、先駆的決意性というテーマの要請であるだけでなく、用語の理解の齟齬を乗り越え

るためにも有効であると考えられる。というのも、先行研究の議論を見るに、次のような事態が、しばしば生じているように思われるからである。それは、ハイデガーの用語をそのまま用いて議論を行っているがゆえに、解釈の違いがどの用語の理解の違いからきているのか分からないという事態である。

本稿では以下のように議論を進める。まず、第2節で現存在の本来性の議論を、具体例に則しながら理解可能な形で解釈しようと試みている先行研究を取り上げる。残念ながらこのような研究は数少ない。そこではアメリカで影響力のある研究者であるブラットナーと T. カーマンの議論を検討し、問題点を指摘する。その上で第3節、第4節で、その問題点を克服するための代案として本稿の解釈を示していく。

本稿の解釈を展開する際に、もう一つ留意したいことがある。それは、『存在と時間』の第1部第1編第2編が整合的であるということを前提に議論を進めるということである。『存在と時間』が未完の書であることから、続きが書かれなかった理由を探る目的で、『存在と時間』の問題点を挙げることを旨とする研究も多数見られる。しかし、このことによって研究上大きな問題が生じている。すなわち、『存在と時間』に不可解な箇所が見つかったときに、その箇所をもって「ハイデガーの議論が整合していない」と結論付けてしまうことが生じるということだ。言い換えれば、解釈困難な箇所を解釈する努力をそこで放棄しがちであるということである。このことは、ハイデガーの議論に対する理解を深めることを妨げると考えられる。したがって本稿では、『存在と時間』の既刊部の議論が整合しているという前提で議論を行う。『存在と時間』の問題点は解釈が十分に行われたのちになされてしかるべきであろう。

## 2. 先行研究の検討

ハイデガーの『存在と時間』第1部第2編についての諸先行研究の多くがハイデガーの用語をそのまま用いており、内容を十全に解釈したとは言いがたい状況にとどまっているという批判を上で行ったが、もちろん具体例に則してハイデガーの議論を理解可能にしようと試みている研究がないわけではない。ここでは、そのような研究として、ブラットナーとカーマンの研究をとりあげ、検討する。両者の解釈にはそれぞれ問題があるものの、具体例に則して、ハイデガーの用語を用いずに『存在と時間』における現存在の本来性に関する議論を解釈しようとしている点において重要なものである。

## 2. 1 ブラットナーの解釈の検討

ブラットナーは、Blattner (1999) で、『存在と時間』の時間性の議論を理解可能な形で具体例に則して解釈しようとしている。ブラットナーはその過程で、現存在の本来性と非本来性を次のように解釈している (Blattner 1999, 76f.)。すなわち、自分が或る特定の役割や社会的な状況にある者だと自覚したときに、明日 (今後) 自分がそうした者ではなくなる可能性を自覚しているときにはその現存在は本来的な在り方をしており、自分がそうでなくなる可能性に思い至っていなければ非本来的な在り方をしているということである。これをブラットナーが用いている具体例を用いて最も簡潔に言えば次のようになる。

或る人が同時通訳者として自分を理解しているとする。この人が自分は同時通訳者であり、明日も同時通訳者であるのだと当たり前のように思っている (あるいはそれすらも自覚していない) なら、この人は非本来的な在り方をしている。一方で、自分の在り方はいつ何時変わるか分からないものであり、明日は同時通訳者という立場、状況にいないかもしれないということを知覚しているなら、その人は本来的な在り方をしていることになる。これは『存在と時間』第1部第2編第1章で主に論じられる、「死 (不可能性の可能性) への先駆」についての解釈である。この解釈の前提として、まずブラットナーが現存在の可能性つまりは存在可能 (Seinskönnen) を能力 (ability-to-be) として解釈している点がある。そのため、ブラットナーは存在可能の具体例として、同時通訳者であるという能力を挙げている。そして、不可能性の可能性を「能力として獲得できないようなもの」ととらえ、獲得して永久に持ち続けることのできる能力に対し、「明日変わるかもしれない社会的な役割や状況」だと解釈しているのである。

このブラットナーの解釈は、具体例に則して理解可能な解釈であり、その点では評価できる。しかしブラットナーの解釈では、現存在が本来的な在り方をしているときと非本来的な在り方をしているときの「可能性」の意味合いが変わるなど、本来性と非本来性の対比をうまく解釈できていないように思われる。このため、その著書の後半で行われている時間性についての議論でも、ブラットナーは、本来接続されてしかるべきと思われる、本来的な時間性と非本来的な時間性と、現存在の本来性と非本来性を接続させることができていない (Blattner 1999, 181-4)。

これだけでも、『存在と時間』を整合的に読むという立場からは、ブラットナーの解釈を退けるに足るが、彼の解釈には別の問題もある。それは、ブラットナーの本来的な現存在についての解釈は、ハイデガーの次のような考えに反するので

はないかということである。

非本来性とは、もはや世界の内に存在しないというようなことをいうのではなく、むしろそれは顕著な世界内存在つまり「世界」と世間における他の人々の共現存在とによって全く気を奪われている世界内存在をなしているのである。おのれ自身として存在しないというこの在り方が、本質上配慮的に世界の内に没頭している存在者の積極的な可能性として機能している。(SZ, 176)

ここでハイデガーは、現存在の非本来的な在り方を、配慮的に世界の中に没頭しており、おのれ自身として存在していないという在り方であるとしている。これは、世界の中で出会う、自分を取り巻いている道具や他者とのかかわりの中に没頭し、そこから自分を理解していることが非本来的な現存在の在り方であり、本来的な現存在の在り方とは、おのれ自身、つまり現存在自身として存在しているような在り方である。つまり、非本来性とはいわば世界の側から自らを理解する在り方であり、本来性とはおのれ自身から自らの在り方が理解されるあり方なのである。

上のハイデガーの考えに照らせば、ブラットナーの考える本来的な現存在は、世界の側から自らを理解していることにならないだろうか。ブラットナーの解釈をよりよく理解するために、ブラットナーが Blattner (1999, 82-8) で述べている「不安」についての解釈も見ておこう。ブラットナーによれば、ある人が同時通訳者であることを自覚しつつ、明日は自分が同時通訳者として自分を理解しなくなる可能性を理解しているとき、自分が同時通訳者として自分を理解するかどうかは気分 (Stimmung) によって決まってくる。自分が同時通訳者であろうとしなくなれば、その人は、同時通訳者としての在り方をしなくなる。同時通訳者として在り続けようとするこの気分は自分でコントロールできないものである。この自分でコントロールできない気分によって自分が何者であるか (何者であろうとするか) が変わってしまうところに不安を感じるとブラットナーは考えている。

ブラットナーが念頭に置いているのがこのような事態であるとする、ブラットナーの考える本来的な在り方をしている現存在は次のように自らのことを理解していることになる。同時通訳者である或る人は、自分の同時通訳者としてのスケジュールや、同時通訳者として扱われるという状況に関わりながら、しかしこの状況が自分の気分によっては、明日は続いていないかもしれないということに不安を覚えている。この説明は、「死へ臨む存在は本質的に不安である」(cf. SZ,

266) つまり、死（不可能性の可能性）に臨んでいる現存在は不安であるというハイデガーの本来性に関わる議論を説明したものになっていそうである。しかし、この事態の中で自分を同時通訳者として自覚している或る人は、世界の中の道具や状況に関わりながら、それらとの関係で自分自身を理解している。これは、「本来的な現存在は世界の側から自分を理解するのではない」という上述のハイデガーの考えに反するものである。したがって、ブラットナーの解釈を受け入れることはできないのである。

ブラットナーは上に取り上げた研究では、現存在の本来性について先駆のみを解釈することで扱っているが、それだけでは不十分であるということも付け加えておこう。次にカーマンの解釈をみていこう。

## 2. 2 カーマンの解釈の検討

カーマンは Carman (2003) で、ハイデガーの本来性についての記述を、ハイデガーの用語を用いずに具体例に則して解釈することを試みている。その中で、カーマンは、現存在の本来性（本来的な在り方）と非本来性（非本来的な在り方）を次のように解釈している (Carman 2003, 282)。すなわち、ある人が自分がそのような在り方（状況）を自覚しているのだが、そのときにその自覚されている在り方と相反するような在り方であり得ないことを同時に自覚している場合には現存在は本来的な在り方をしており、自覚されていないときには、現存在は非本来的な在り方をしているというものである。これをカーマンが使っている具体例をそのまま用いて述べれば次のようになる。ある男が自分のことを「誠実な夫」として自覚しているとす。誠実な夫は浮気な独り者であることはできない。ある男が自分を「誠実な夫」として自覚しているときに、同時に「浮気な独り者ではない」ということを自覚していれば、ある男は本来的な在り方をしており、同時にその自覚がなされていなければ、その男は非本来的な在り方をしているということである。これは、本来的な現存在は「死へと臨んでいる」(cf. SZ, 251) とハイデガーが述べているのをカーマンが解釈した結果である。カーマンは「死（不可能性の可能性）」を「自分が今あるその状態とは両立しない或る可能性」と解釈したのである。

以上が先駆についてのカーマンの解釈である。一方で決意性とは、彼によれば、「おのれが固有であるという事実に敏感であること」(Carman 2003, 295) である。決意性において現存在は、おのれ自身についてよりはっきりと知るのだが、ここで死と決意性は以下のように関係している。つまり、死（不可能性の可能性）へ

と先駆している際に、より自らの状況への関係が自由であるために決意的であることができるという形で、先駆と決意性が関係している。おのれを完全に知ること、つまり負い目が無根拠であることの受け入れは、死という最も際立った可能な不可能性への積極的な企投においてのみ実現するということを、ハイデガーの記述に沿いつつ、論じているのである (Carman 2003, 298f.)。

この解釈、特に死への先駆についての解釈は具体例に則して確かに理解可能である。また「不可能性の可能性」を「今の自分からは不可能である可能性」という意味に解釈することも無理がない。しかしカーマンの解釈は以下の点から問題があるといえる。まず、誠実な夫が、自分を「浮気な独り者ではあり得ない」と自覚しているときに、単に「誠実な夫」として自覚しているのと異なる在り方をしているといえるだろうか。むしろ「浮気な独り者ではあり得ない」という自覚は、世界を事柄の連関としてみるハイデガーの理解からしても、「誠実な夫である」という自覚の中に含まれるのではないだろうか。カーマンの解釈は、概念に含まれるものを理解しているかどうかというところまで単純化できてしまう。すると、「本来的な現存在は世界の側からおのれを理解しない」というハイデガーの考えと齟齬をきたすという批判がカーマンのこの解釈にも当てはまってしまう。

カーマンのように考えたとき、或る男は明らかに、世界の側、つまり自分を取りまいている道具や状況から自分を理解している。これは、ハイデガーが現存在の本来性と非本来性を現存在の側から自分を理解しているか、世界の側から自分を理解しているかという対比で捉えていることと矛盾する。このように見ると、カーマンの解釈はブラットナーと同じ問題を抱えていると言える。

以上、カーマンとブラットナーの解釈を検討してきた。二人の解釈は、ハイデガーの死（不可能性の可能性）についての記述を具体例に則して説明しようとしたものになっていた。しかし両者の解釈は、ともに『存在と時間』の「本来的な在り方をしている現存在は世界の側から自らを理解するのではなく、現存在の側から自らを理解する」というハイデガーの考えにそぐわない。したがって、両者の解釈は退けねばならない。

### 3. 本稿の解釈の方向性

そこで本節では、ブラットナーとカーマンの議論の問題を解消すべく、本稿の解釈を示していくことになるが、その前に指摘しておかなければならないことがある。それは、『存在と時間』第1部第2編の解釈についての議論に混乱が見られ

る理由に係ることである。そもそも、現存在の本来性、非本来性にはそれぞれ様々な要素が含まれている。つまり、「現存在は本来的にあるとき F である」という形の文を考えたときに「F」に入る状態は複数あるということである。非本来性についても同様である。現存在の本来性、非本来性とは現存在の在り方を示す言葉であり、或る一つの現存在の在り方にも、豊かな内容が含まれるからである。従来の研究でも、現存在の本来性と非本来性の様々な側面が取り上げられてきた。しかし、現存在の本来性と非本来性の議論を取り扱う際に、どの側面が対比の核であり、どの側面が本来性と非本来性の対比にとって付随的なものであるのかということを見失ってはならない。従来の研究に見られる混乱は、この本来性と非本来性の対比の核を見失っていることに端を発しているように思えるのである。したがって、以下本稿では、現存在の本来性と非本来性の対比をブラットナー、カーマンの議論から取り出し、それとは異なる対比を提示することで、ほかの概念とのつながりを整理し、ハイデガーの議論において「現存在の本来性」が占めている位置を明らかにする。

ブラットナーの本来性と非本来性の対比の核は、自分が何かになるろう、何かであろうという意志を持っているときにそれが実は変わりうる（翻意されうる）ものであるということを見失っているか否かということにある。

カーマンの本来性と非本来性の対比の核は、自分がある類のものであるということを見失っているか否かということにある。同時に、同時に成立しえない別者ではありえないという自覚が同時に含まれているか否かということにあった。

本稿の解釈の本来性と非本来性の対比は、現存在の存在可能の側面から言えば、次のようになる。すなわち、現在自分は或る者であるが、自分をその或る者、例えば同時通訳者として自分を理解するのだが、それと同時に現存在としてつまり、同時通訳者などの特定の可能性（在り方）を考慮に入れない現存在、現存在そのものとして理解している場合に現存在は本来的な在り方をしている。一方、どのような特定の者であるのか、つまり同時通訳者であるのか否か、料理人として理解しているのか否かといった基準でのみ自分を理解している場合には、その現存在は非本来的な在り方をしているという対比である。現存在としての自分を自覚するとは、最も単純に言えば、自分は同時通訳者などの特定の何者かである前に、「この存在（Dasein）」であるということを見失っているか否かということである。このとき自覚されている現存在としての現存在がどういう存在であるかについては、第4節でハイデガーの本来性についての議論の内実を具体例に則して記述していく過程でより詳しく明らかになる。現存在の本来的な在り方の全体を明らかにする前

に本節では、本稿の解釈における本来的な現存在の在り方がどのように不可能性の可能性と関わっているのかということの説明しなければならない。

現存在が現存在として存在することと不可能性の可能性すなわち死 (Tod) へと企投することを本稿では次のように解釈する。ここからは『存在と時間』の記述を丹念に追いながら不可能性の可能性とはどのようなものであるのかということを見ていく。不可能性の可能性へと投企する、ハイデガーの言い換えによれば、死へ臨む存在とはどのようなものか。まず、次の引用から見てみよう。

死は現存在自身の最も固有な (*eigenst*) 可能性である。この可能性へ臨む存在は、その中で現存在の存在そのものが問題となるような現存在自身の最も固有な存在可能を現存在に開示する。(SZ, 263)

ここでは死へ臨む存在において現存在は自らの最も固有な存在可能を現存在に開示すると言われている。死に臨むということは、一見、自分がいなくなることについて何等かの理解をすることだと考えられそうである。しかし、この引用を読むと、「現存在の存在そのものが問題となるような」と述べられている。現存在は死へ臨む存在という不可能性の可能性へと企投する在り方において、自分自身が死んで無くなってしまったことではなく、むしろ在ることについて何かしらを理解しているようである。ここで「死」はわれわれが通常使う、現存在が存在しなくなるという意味からは切り離して考える必要がある。上でみた内容をより詳細に知るために、次の引用を見よう。

自分が死へ引き渡されていること、したがって死が世界内存在に属していることについて、現存在はさしあたりたいいは、はっきりと知らずにおり、まして理論的な知識などを持たずにいる。しかし、死の中へ投げられていることは、知識よりももっと根源的に、もっと痛切に、不安の情状性において現存在に露わになるのである。死へ臨む不安は、最も固有な、係累のない (*unbezüglich*)、追い越すことのできない (*unüberholbar*) 存在可能を「目前にしての (*vor*)」不安である。この不安が何に臨む不安であるかということ、それは世界内存在そのものに臨む不安である。(SZ, 251)

ここでは、次のようなことが言われている。死に臨んで現存在は不安であるのだが、この不安は、最も固有な、係累のない、追い越すことのできない存在可能へ



臨んでの不安である。さらに、その不安は、世界内存在そのものに臨む不安だと言われている。これは、死へ臨む存在としての現存在が不安がっているのは、世界内存在という在り方をしている現存在そのものだということである。死は通常現存在がなくなることだと捉えられる。ここでは、その死の特徴だと考えられているものが、むしろ現存在の存在（現存在が在ること、現存在の在り方）そのものの特徴であるということが生じている。このことは、最も固有な、係累のない、追い越せないという死についての規定が、『存在と時間』第1部第2編第2章では決意性と一緒語られていることから裏付けられる。それに臨んで不安になるということだけでなく、「最も固有な」、「係累のない」、「追い越すことのできない」という死の特徴もまた、現存在の非存在ではなく、存在の特徴である<sup>1</sup>。

これを具体例に則して考えれば次のようになる。或る人が同時通訳者であり、同時通訳者として自分のことを理解しているとする。この理解のみの場合、この人は非本来的な在り方をしている。ところが、この人が自分を同時通訳者である前に現存在であることを自覚しているとき、この人は本来的な在り方をしていることになる。「現存在である」という可能性はどの現存在にも当然のように備わっている（そして常に現前し現実化している）可能性であるが、この可能性はその現存在が決してそのようにはならない、そのようになってしまっただけでは現存在ではない可能性の手前まで地平のように広がっているものである。不可能性の可能性へと関わることで現存在は自分が同時通訳者である、料理人であるといった諸可能性の前提としての可能性に思い至る。つまり自分が現存在として生きているという、他の諸可能性とは異なるレベルの可能性の自覚に至るのである。ここで言う、「前提」とは、現存在が存在することによって、はじめてその現存在が同時通訳者であったり、料理人であったりできるということである。

実はこの自分が現存在であるという前提に自覚的になるとき、同時通訳者である或る人は、自分が同時通訳者であることとは別の可能性も持っているということにも思い至ることができる。例えばピアノ奏者になる可能性も持っているかもしれないし、同時通訳者をやめてアルバイトをしながら趣味の旅行に時間を割くこともできるかもしれない。これはブラットナーの解釈の同時通訳者でなくなる可能性に思い至るという部分に近い。しかし本稿の解釈は、あくまで対比の核を自分が「現存在であるということ（可能性）」を生きていると自覚しているかどうかというところに置く。これは「本来的な現存在は現存在の側から自らを理解する」というハイデガーの主張にも合致する。同時通訳者であるという可能性は、仕事のための道具といったものとの関わりなしにはありえないが、現存在である

という可能性は世界と関わることと関係なく成り立っているような可能性である。これによってカーマンとブラットナーの解釈が矛盾していたハイデガーの記述にも合致することになる。

また、本稿の解釈における本来的な現存在が例えば同時通訳者以外でもあるという諸可能性に出会うという点は、ブラットナーの同時通訳者でなくなる可能性に思い至ることよりも積極的な意味をもつ。本稿の解釈によれば、同時通訳者であるその人は本来的な在り方であって、自分が同時通訳者であるということが無数にある自分の可能性のひとつにしか過ぎないということに思い至るのである。

さらに、この人が、自分が同時通訳者である前に現存在としての可能性を生きていることに自覚的になることの中には、自分が他の現存在にはその存在を引き受けることのできない固有の現存在であるということへの自覚も含まれている。このときこの或る人は数ある自らの諸可能性のうち限られた可能性しか生きていないにも関わらず、その自らの現存在としての可能性は自分にしか生きられず、その生は自分で引き受けるしかない。このことの自覚によって、本来的な在り方をしている現存在は、自分が生きる結果を他者に生きてはもらえず、自分で引き受けるしかないところに不安を感じるのである。この不安は次節でハイデガーの本来性の議論全体をあつかう際により明らかになる。

以上で、カーマンとブラットナーの解釈に対する本稿の解釈を示すことができた。しかしここまでの議論では、ハイデガーの本来性の議論の全体像が分かったわけではない。本節では主に第1部第2編第1章で扱われる死への先駆（＝不可能性の可能性へと関わる存在）の内容をあつかった。次節では良心による決意性の内容も取り入れながら、現存在の本来的な在り方がどのようなものであるのかということ进行を明らかにしていく。

#### 4. 現存在の本来性

ここからは、上述の方向性に沿って、本稿の解釈を具体例に則しながら示していく。ここではブラットナーにならって一貫して同時通訳者の例を用いる。その中でハイデガーが用いている現存在の本来的な在り方に関する概念がどのように位置づけられているのかも明らかにする。ただし、本来性に関わる要素は歴史性なども含め多くあるが、今回は紙幅の関係上、「不可能性の可能性に臨むこと」、その際の「不安」、「良心」、「決意性」を中心に明らかにする。このことによって、

先駆（不可能性の可能性へ臨むこと）と決意の関係も明らかになる。

A氏は同時通訳者である。彼は自分が関わっている世界、すなわち同時通訳者としてのスケジュールや辞書、周囲の人の同時通訳者としてのあつかいなどから、自分は同時通訳者であると理解している。これは、A氏の日常的な、つまり非本来的な在り方である。A氏が本来的な在り方をしているときはどのようなになるだろうか。本来的な在り方をしているとき、A氏は自分が差し当たり同時通訳者であると理解することをやめるわけではない。しかし同時に自分は同時通訳者である前に固有の現存在としての可能性を生きていることを自覚する。この自分の生きている「この現存在」という可能性は役割や状況の他の諸可能性とは異なり、他の人には変わってもらえないものである。つまり、同時通訳者としての役割は、例えばA氏が風邪で寝込めば、他の人に替わってもらうことができる。しかし、自分がA氏という現存在であることに関わることについては他の人に替わってもらうことはできない。そして、自分の現存在としての固有の生はどのような生であろうとも、自分で引き受けるしかなく、そこから逃げて他の人に肩代わりを頼むことができないことを自覚して、自分の生は今のままでいいのだろうかと不安になるのである。

さて、以上が、具体例に則して死へ先駆しての不安について記述したものである。ではここに良心と決意性はどのように関係してくるのであろうか。

本来的な在り方をしているA氏は、自分が同時通訳者であるということが、実は自分の諸可能性のひとつにすぎないということを自覚する。現存在といういろいろな可能性の前提となる在り方をしていることを自覚すれば、自分がピアノ奏者である可能性や旅行者である可能性といった、普段は考えていないが実は自分の前に開けている様々な諸可能性に気が付くのである。ここで同時通訳者であるということが無数にある自分の諸可能性のひとつに過ぎないということを自覚したA氏はまた、自分が今なぜ同時通訳者であるのかを考え、次のことにも思い至るのである。つまり、同時通訳者であるという可能性は、自分の意志のみで選び取ったものではないということにである。A氏が同時通訳者になり仕事をここまで続けてくるまでには、様々な偶然の出会いや幸運があった。同時通訳者を志すきっかけは、たまたまつけたテレビであったし、同時通訳者をやめようと思った矢先に素晴らしい同時通訳の仕事に巡り合い、続けることにした。そもそも自分のような環境で生まれてきたことがなければ同時通訳者になってはいなかっただろう。このように、A氏にとって同時通訳者であることの根拠は自分の中にはないのである。現存在はそもそも生まれたということから始まり、徹底的に状況の

中に投げ込まれ、その状況の中から自分を理解していく。ということは、自分自身の身を根拠に何かを選ぶことはできない。裏を返せば自分の決定や努力によって現在同時通訳者であると思っていたが、実は今同時通訳者として充実した生活を送っているのは自分のおかげではないということに気が付くのである。これは、ハイデガーの次の記述の、良心が告げる内容に合致する。次の引用を見よう。

このように呼び出しつつ呼び戻す良心の呼び声 (vorrufender Rückruf) が現存在にほめかしていることは次のことである。つまりそれは、現存在がおのれの無的な企投の無的な根拠 (nichtiger Grund seines nichtigen Entwurfs) として、おのれの存在の可能性の中に踏みとどまりつつ、世間への自己喪失からおのれを自己自身へ連れ戻すべきであるということ、その意味で現存在に「負い目あり (schuldig ist)」ということなのである。(SZ, 287)

引用によると、良心が告げるのは、現存在がおのれの無的な企投の無的な根拠として、自分の存在の可能性の中に踏みとどまりつつ、世間への没頭から抜け出さなければならないということである。引用で述べられている「現存在が無的な企投の無的な根拠である」とは、現存在が徹底的に状況の中に投げ込まれており、自分が例えば同時通訳者であること、また他のいかなる可能性に企投するにしてもその根拠は自分の中にはないということである。そして、自分が今このようにあることは、自分のおかげではないということが「負い目」となるのである。この、自分が何かを選ぶときにその根拠はないということ、そして自分が今このように在るのは自分のおかげではないという負い目を自覚させ、世間への没頭から抜け出させるのが良心のはたらきなのである。

では決意性とはどのようなことだろうか。負い目ある現存在の在り方は、現存在にとって本質的であるにも関わらず、現存在が常に自覚しているものではない。現存在はさしあたり世間の常識をよりどころとしており、自分が何か根拠を持っていると思っ込んでいる。しかし、この現存在が本来的である在り方と非本来的である在り方の両方に開かれているということもまた、現存在の本質的な在り方である。現存在は常に負い目ある存在であるのだが、非本来性においては自覚されていない。これが良心を持つとうとする意志によって自覚へともたらされるのである。この良心を持つとうとする意志を持ち、良心の呼び声に応えようとする形で、自らの負い目ある存在を自覚して在ることをハイデガーは決意性と呼ぶ。引用をみる。

このように良心を持つとする意志に含まれている開示性は、不安の心境と最も固有な負い目ある存在へ向かう自己企投としての了解と、沈黙としての語りとによって構成されるものである。この開示性は、現存在自身においてその良心によって臨証される本来の開示性である。この際立った本来の開示性は、最も固有なおのれ自身の負い目ある存在へ向かって、沈黙の内に、不安を辞せずにおのれを企投するのであるがこの際立った開示性を我々は、決意性（Entschlossenheit）と名づける。（SZ, 296f.）

決意性は開示性、つまり現存在が何事かをわかっている在り方として、次のものを分からせる。それは最も固有なおのれ自身の負い目ある存在である。決意性において、現存在は、自分の在り方である最も固有な負い目ある自分自身の在り方を存在しつつ、自分がそのように存在していることを自覚するのである。

これは例を用いれば次のようなことである。本来的な在り方において A 氏は、自分が同時通訳者であることの根拠が自分の中にはないことを自覚する。そして A 氏は自分の中に根拠がないにもかかわらず、自分が同時通訳者であり続けることを常にすでに選び続けている。あるいは同時通訳者以外の可能性を選ぶ。根拠なく何かを選ぶことは不安である。この不安から逃げ出さずに、根拠のない自分の存在を自覚することが決意性なのである。

良心と決意性に関わる事態は、自分の固有の生を自覚するという先駆と深く結びついている。固有の現存在としての可能性を生きていることの自覚を、上述の事態と結びつければ次のようになる。自分の中には根拠がなく、偶然に左右される中で、自分で引き受けるべき生の選択をしなければならない。これは、先駆によって自分の生が自分に固有なものであり、他のものを根拠にすることはできないということの自覚に至る。そして、実際には自分のみによって選択することは不可能であるにもかかわらず、自分の選択として選択を行い、しかもそれがどのような結果になろうとも、その生は自分で引き受けなければならないことを自覚する。A 氏は状況に関わっている中で同時通訳者であることを選び続けているが、それが A 氏にとってよくない結果に終わろうとも、「こんなはずではなかった」と言ってその生を他の人に肩代わりしてもらうわけにはいかないのである。このような生を自覚するからこそ、本来的な在り方をしている現存在は不安なのである。先駆と決意性は、このような形で関連した現象である。

以上のような現存在の本来的な在り方において自覚されている現存在の在り方は、指摘されれば、現存在である我々にとって当たり前のことである。しかし普

段は差し当たり我々はこのような在り方をしていることを切実には自覚しない。現存在が本来的に在るかどうかということは、自分がそのような存在であることを「自覚」しているか否かにかかっているのである。

## 5. 結論にかえて

以上本稿は、具体例に則しながら、ハイデガーの『存在と時間』における現存在の本来性がどのような在り方を指しているのかを明らかにしてきた。本稿では具体例の中で、不可能性の可能性（死）、不安、良心、決意性といったハイデガー独特の概念がどのように位置づけられるのかということを示し、その中で先駆と決意性が一つの先駆的決意性として連関しているものであることを明らかにした。

さて、本来ならば、本稿のような解釈がきちんとハイデガーの存在論のプログラムの中に位置づけることを示すためにも、時間性の議論への接続を行う必要がある。しかし、本稿では紙幅の関係上その議論を展開することはできない。『存在と時間』における現存在の本来性の議論と時間性の議論がどのように接続しているのかということは、稿を改めて議論することにしたい。

---

<sup>1</sup> このことは、我々が日常的に死について語るときにすでに起こっていることである。例えば、我々が人の死に様について話すとき、そこで話されているのは、その人の死ぬ間際の生き様のことを話している。ハイデガーは実際に次のような議論を行っている。すなわち、死亡すること（Sterben）は現存在がおのれの死（Tod）へと臨みつつ存在するときの存在の仕方を表す語とした後で、生物学や心理学においても、このような死の実存論的概念を根底において死が理解されていると言っている（SZ, 247）。死亡の心理学について述べている次の箇所は、我々が死について語る時生について語ってしまっていることをよく表している。「その上『死亡』の心理学というものが与えるのは、死亡自身に関する解明であるよりも、むしろ『死亡するもの』の『生命』に関する解明なのである。」（ibid.）。

### [参考文献]

- Heidegger, Martin. 2006. *Sein und Zeit*, 19. Auflage, Max Niemeyer. (SZ)  
Blattner, William D. 1999. *Heidegger's Temporal Idealism*, Cambridge University Press.  
Carman, Taylor. 2003. *Heidegger's Analytic : Interpretation, Discourse, and Authenticity in Being and Time*, Cambridge University Press.